

中北.com

地域教育情報紙

中北教育事務所
地域教育支援スタッフ

no
6

TEL 0551-23-3046

FAX 0551-23-3013

チュウホクドットコム

中北の地域社会 (COMmunity) の心の交流 (COMmunication) をめざします

平成28年度 第3回 峡中地区・峡北地区 合同地域教育推進連絡協議会

子どもの虐待 - 子どもの心とそのケア ~

山梨県立大学 西澤 哲 教授



峡中・峡北地区地域教育推進連絡協議会が2月23日、北巨摩合同庁舎で開催されました。この日は、子どもの虐待の研究者として第一線で活躍されている西澤哲氏(山梨県立大学教授)の講演を行いました。今回の講演は、委員以外からの問合せも多く、保育園を中心に一般参加が60名ほどあり、合計120名ほどの方が講演を聴きました。以下に、講演の概要をお伝えします。

1 虐待・ネグレクトが子どもに与える心理的影響をとらえる基本的視点

<対人関係への影響>

- ◇虐待を受けた子は、保護者的な立場の相手に対し、無意識に怒りを引き出すような対人関係を形成してしまう傾向がある。(虐待的対人関係の再現性)
- ◇ネグレクトで放置された子は、アタッチメント障害を引き起こす。信頼する親への依存関係から、親は自分を守ってくれる、大人は信頼できる、生きることは楽しいなど、人間に対する信頼関係の基礎を築くのがアタッチメント。この欲求が充足されないとアタッチメント障害を起こす。例としては、幼少期、誰でもベタベタとくっつく人懐こさを示す反面、本来、人間に対する信頼感を築けないことから、小学校高学年頃から集団から孤立する傾向、また、アスペルガー障害の中心特徴といわれる「共感性」の欠如、他人の痛みを、自分の痛みとして受け止められない、相手の立場(視点)に立って、事態を把握できない、そのため場の空気が読めない、孤立する、などである。

<自己調節障害>

- ◇トラウマ関連障害による過敏性、過剰反応。感情・感覚を自己調節できず、怒りを爆発させる傾向がある。
- ◇アタッチメント関連障害による生理、感情・感覚、行動の調整障害。不快な状態を快な状態に自力で戻す調節ができず、自傷行為等を起こす傾向がある。

2 しつけの意味と内在化されるイメージ

<「しつけ」の欠如による発達障害>

- ◇「しつけ」とは、本来、子どもを管理する「discipline」の意味でなく(それは明治以降西洋から輸入された概念)、日本では古来、普通に行われてきた行為であり、泣いている赤子を、大人があやし、世話をするという誰でも行ってきたことである。これによって、子どもは不快を快に自分から変える自己調節機能を身につける。「しつけ」とは、<生後直後から開始される養育者の(子どもの自己調節力を育てるための)支援>である。しかし、虐待・ネグレクトを受けた子どもはこの支援の欠如により、自己調整機能を育てられない発達障害を引き起こしている。

<アタッチメントと内的ワーキングモデル>

- ◇ 泣いている子どもは、「ママ～」といって親に安心を求める。この「Secure Base(安全の基地)」をもつことは、親や大人に対する信頼関係の基礎となる。そういう子は、次第に心の中に自分を保護してくれる親のイメージを内在化することで、親離れ、自立ができるようになる。この内在化されたイメージは、「見守り機能」であり、小学校1年生ごろになれば、一日、親と離れても大丈夫となり、学校に行けるようになる。心の中の「親」に守られているという安心感があるからである。また、「見張り機能」もある。これをしたら、親がどう思うだろうと考える道徳観の基盤である。虐待・ネグレクトを受けた子の心の中は空洞(他者が住んでいない状態)であり、彼らが非道徳的行動をくり返し、自立できないのはここに起因する。

3 子どもの心のケア

<トラウマ状態からの回復と曝露(exposure)>

- ◇ 虐待とは「トラウマ性体験」である。回復のためには「曝露(断片化した記憶を整理し、語れる物語にすること)」が必要である。そのためには、厳しい体験に真剣に向き合い、寄り添うことが重要である。
- ◇ ネグレクトは見捨てられ体験であり、愛情・依存欲求の充足の機会が剥奪されており、そのケアは愛情・依存の充足体験が必要である。

<教師、大人の役割>

- ◇ 虐待・ネグレクトを受けた子どもたちは、適切な時期に愛情・依存欲求の充足体験を剥奪され、自分の人生を奪われた状態である。この欲求を充足させ、満足を得たとき、自立がはじまる。信頼できる大人がいる、自分を大切に思ってくれて向き合ってくれる人がいるという体験が、彼らの心の中に他者(安心の基地)のイメージを埋め込むことになる。このケアはいわゆる「甘やかし」ではなく、彼らの欠乏した欲求を充足させることを目的とする行為と捉えたらよい。教師は、親にかわる重要な位置にいるのではないか。たとえ短い期間でも、そういう思いで向き合うことが望まれる。

4 アンケートから

<参加者の評価>

・良かった 96%(82名) ・普通 0% ・良くなかった 0% 未記入3名 (回答者85名)

<感想>(一部)

- ◇ 今回の講演は私が今まで参加した講演のなかでBestなものでした。西澤先生を知ることができましたし、先生のお話する内容がものすごく素直に受け入れることが出来ました。機会があれば再び拝聴出来ればと思います。(教育委員会・男性)
- ◇ 大変楽しい話術の中で子どもの虐待について学ぶことができました。保育、教育関係者の参加が多い中で「依存欲求をとことん満たす体験が必要」という内容は、子を持つ親としても、虐待防止活動に取り組む者としてもありがたいものでした。(地域団体・女性)
- ◇ 今まで子どもを「甘やかす」ということは、子どものためにならないと思い「きびしく」接してきたことを強く反省しました。依存欲求をとことん満たせるようにしたい。(行政・女性)
- ◇ 虐待について、まだまだ知識不足であったことを痛感しました。虐待ということはわかっていながらも、支援という部分では役割を担っていないのかなと感じました。保育士という職業のなかで現場での共通の認識をしないといけないのかなと感じました。貴重なお話ありがとうございました。(保育・幼稚園 女性)

アンケートでは、たとえ一年でもこうした子どもに向き合うとき、信頼される大人がいるんだ、と思われるようにしたいなど、これから現場での取り組みに生かしたいという声を多くいただきました。

また、この日は地域活動団体「山梨子ども虐待防止ネット」代表の吉田利志美さんも訪れ、活動の紹介をされました。連携が進むことを期待します。(飯田)



保幼小中高の異校種間の連携は喫緊の課題ですが、まず異校種の授業参観からはじめてはいかがでしょうか。当事務所地域教育担当では、管内の「公開できる授業一覧」を毎年作成し、配付しています。来年度より紙冊子から電子データ送信に切り替える予定ですが、広く活用いただければ幸いです。

白根飯野小学校

小学校英語科の全面実施に備え、管内では韭崎市、南アルプス市、昭和町が小中高連携し、英語教育強化地域拠点事業研究指定を受けて取り組んでいます。12月6日には、南アルプス市立白根飯野小学校で、6年生の英語科の授業公開がありました。この日は、習った英語を実際に使ってみようとしてスカイプを活用し、オーストラリアのウェラーズヒル州立小学校5年生と交流をしました。実際に通じたことに、児童は満足していました。この日は、小学校のみならず中学、高校の先生方も来校し、熱心に授業を参観していました。



山梨英和中・高等学校

2月9日、山梨英和中学校・高等学校では、SSH(スーパーサイエンスハイスクール)研究成果発表会が開かれました。高校1年生のScience in Englishの公開授業を参観。惑星の調べ学習を、班ごとに発表し、質疑や協議を行います。生徒はそれぞれ個人用のiPadを持っていて、それを操作して、意見交換から発表までします。しかも、教師との会話、生徒同士の意見交換も、英語で行われていました。この学習スタイルなら、世界のどこの学校でも通用するものとなるだろうと思われました。教育のグローバル化が着実に進んでいるのだと感じました。



巨摩高等学校

2月15日に、SSH研究成果発表会がありました。公開研究授業は、SS数学Ⅰ(1年)とコミュニケーション英語Ⅱ(2年)です。巨摩高校では、生徒が自主的に自ら考え、学んでいく教育スタイルを「巨摩スタイル」と名付け、実践に努めています。この日公開された授業では、自分で考える、グループで意見交換をする、全体に対して発表するという活動を組み合わせ、主体的な学びに繋げようとしている様子が強く感じられました。

また、生徒の研究発表(ポスターセッション)では、SSHの対象となっている理数コースの1年生12本、2年生13本の研究と、2年生の理数コース以外の生徒による課題研究15本の発表がありました。SSHを一部の生徒のみが参加するものとせず、全校にその成果を波及させる取り組みは、非常に価値があると言えます。より高い研究レベルを追究するとともに、研究の裾野が広がっていくことを期待したいと思います。



2月7日(火)に、今年で12回目となる生徒研究発表会が行われました。保護者をはじめ県教育関係者・企業代表者等多くの方が招かれ、生徒の活動を間近に見ることのできる貴重な機会です。発表会の前にアトラクションとして、同校太鼓部の演奏がありました。同校太鼓部は、今年度の高校芸術文化祭で最優秀となり、来年度全国総文祭へ出場するそうです。とても迫力ある演奏でした。



発表は、2年生が「企業実習」と「土曜活用事業(プロフェッショナル探求)」の体験報告について、また、各学科の代表者(3年生)が「課題研究」について行いました。専門分野の知識を駆使した研究が多く、レベルの高さを感じました。課題研究の内容は、次のとおりです。

電子機械科：「スターリングエンジンの製作」	電気科：「国家技能検定合格を目指して」
情報技術科：「ARを使ったオブジェクト表示」	環境化学科：「D-リモネンの抽出」
システム工学科：「ロボコン山梨に参加して」	制御工学科「ラジコンカーの製作」

子どもたちに本をどう与えるか？ (県立図書館の講座から)

山梨県立図書館では、本年度も地域の子どもたちへの読書活動推進を目的に、「子どもの読書活動推進スキルアップ講座(年間5回)」と「子ども読書指導者養成講座(年間4回)」を開きました。その中からランダムに紹介しましょう。

藤本朝巳先生(フェリス女学院教授)は、「絵本のしくみと楽しみ方」をテーマに、絵と文書がどう関連して絵本が構成されているか(絵本のコード)を読み解く話をしてくださいました。子どもの目線を誘導しながら、本をめくるコツなど、実践的な話にも及びました。



西村和子先生(博雅堂出版代表取締役)は、美術館巡りをきっかけに、子どもたちに「最高の色で、できるだけ大きな本で」名画に親んでもらいたいと出版社を立ち上げ、『おはなし名画』を刊行しました。子どもと美術書をつなげる工夫、絵画を通し、異文化とふれることの重要性など、本作りの体験もふまえて話されました。



土井美香子先生(NPO法人ガリレオ工房理事)は、「読書の地平を広げる理科読」をテーマに科学の本に導く工夫を話されました。実際に参加者に発光ダイオードや偏光板など配り、実験などをしながら、楽しく本の紹介のこつを教

えてくださいました。この他にも、堀川照代先生(青山学院女子短期大学教授)からは、読書指導のめざすものや図書館の役割、竹中淑子先生(子どもの本研究所)からは、図書館員としての選書の仕方など、著名な先生方をお招きして有益な講座が展開されました。公立・学校図書館司書の方、読み聞かせの会の方などが熱心に参加し、山梨の子どもたちの読書活動がますます豊かになると思われま

平成28年度 『中北.com』 No.6

編集・発行 中北教育事務所 地域教育支援担当
飯田 哲夫 矢崎 克洋

〒407-0024 韮崎市本町4-2-4

電話 0551-23-3046

Fax 0551-23-3013

中北教育事務所のホームページでもご覧になれます。

<http://www.pref.yamanashi.jp/kyoiku-ch/index.html>